

冷たい石の床に長々と寝そべっていたラーデイは、灰色の毛に覆われた耳をぴくりと動かした。近づいてくる音を聴き分けたらしく、おもむろに身を起こす。子供の一人くらいは軽々と乗せられる巨体をのそりと動かして、歩き始めた。

灰色狼が腰を据えたのは、外界と室内とを隔てる重い扉の脇だ。直後、来客を告げる軽やかな鈴の音が鳴り響いた。

「フィリス、いるか？」

来客は、扉を開けるなりそう呼ばわった。足の爪先までを覆い隠すほどの厚い外套を羽織っている。その切れ間から、決して軽そうには見えない長剣の鞘が見え隠れしている。

地面を擦るかに思える裾を軽やかに捌き、足音も立てずに動く様は、大型の肉食獣を思わせた。

表情は見えない、砂の侵入を防ぐために首に巻き付けた布地に、深く顎を埋めているからだ。

扉を閉めた来客が、襟巻きと外套を脱ぎ去った。

豊かな黒髪が、男物の質素な服の背を流れ落ちる。褐色の肌濃い色の瞳をした若い女性が姿を現した。

唇は赤く、頬は健康的に色づいている。大きな瞳が意志の強さを示しているが、それでも輪郭にはまだ幼さの面影が残っていた。

ふう、と息をついた彼女は、自分の足下で盛大に尻尾を振る灰色狼に気付き、たちまち破顔一笑した。

「ラーデイ、元気だったか？」

行儀よく座っている狼の首に、彼女は恐れ気もなく両腕を回した。そのまま、長い毛足の首に、顔を埋めるようにする。

狼は、嫌がる風もなく、ゆつたりと尻尾を振っている。

女性の手がラーデイの胴体に回り、硬い毛を逆撫でるようにかき回す。

その動きが、ふと止まった。

「ラーデイ。——お前、また太ったな？」

狼の両耳が、情けなく倒れた。女性の手が首元から腹まわりの肉付きを確かめるように動く。ラーデイは、狼にあるまじき情けない鼻声で鳴きながら、逃げるように体をよじった。

そうして逸らされた鼻先が、偶然女性の袖元を掠める。とたん、意地なく伏せられていた耳が、ぴんと立ち直った。

今までの嫌がりようはどこへやら、甘えた声で体をすり寄せてくる狼に、彼女は呆れたように笑った。

「太るのは、食い意地が張ってるからだぞ」

けれど、食べ物の匂いを嗅ぎつけた狼にその言葉は抑止力にもならなかった。袖の中に鼻先を突っ込む勢いは、だんだんと容赦がなくなってくる。

「分かった、分かったから」

女性は立ち上がって、懐に収めていた包みを取り出した。羊の干し肉をみた狼の目が、一段と輝いた。

「お座り」

命令一下、灰色狼は犬のごとく従順に、ぴたりと座った。尻尾をちぎれんばかりに振りながら小首を傾げて相手を上げる仕草は、狼の誇りの欠片もない。

「仕方ないな」

女性が、羊肉を宙に放った。そこだけは狼に相応しい俊敏さで身を翻したラーデイは、見事獲物をくわえ込んだ。

「ラーデイが太るのは私のせいじゃなくて、もっぱらあなたのせいだと思っんですけど」

ふいにかかった声に、女性は唇を笑みに緩めて立ち上がった。

「運動嫌いはお前に似たんだらう。昔はもつと活発だったぞ」

「この暑さで散歩なんかしたら、倒れます」

奥の部屋から姿を現したのは、瘦身の男だった。陰に

なっていることを差し引いても、肌や髪の色が薄いことははっきりと分かる。熱砂の中に生まれた民でないことは一目瞭然だ。

「軟弱者め」

女性は、笑顔のままなじるように言った。

男は落とすように笑って、肩をすくめただけだった。

北方の、緑と雪に囲まれて過ごす、太陽の遠い国で生まれた彼にとつて、石さえも焼く白い陽光はほとんど凶器に近いのだ。

女性の言葉を受け流して、男は恭しく腰を折った。

「いらつしやいませ、女王陛下」

「リンシャと呼べ、と言ったはずだ。いつまでも覚えないう奴だな」

砂漠の中のオアシスに広がる小国であるアズラクの、才女の女王は、不快げに唇を歪めた。

赤い唇が吐き出す言葉は、男のような乱暴な言い回しだ。それが、王として振る舞う彼女の癖だった。

「一度は礼を尽くしておかないと。いくら何でも不敬罪での投獄はごめんです。あなたは女王、私は滞在を許されているだけのしがない絵描きですからね」

「毎回口が達者になっていくな」

砂漠の民の言葉を嫌みさえ交えて流暢に紡ぐ男を、リンシャは睨みつけた。